

御用聞き時代の「見本箱」再現

30年ぶりに紙袋刷新



御用聞き時代に使われた見本箱をイメージして刷新した紙袋＝大垣市依町の「榎谷」で

黒地に赤の家紋。大垣市依町の老舗和菓子店「榎谷」が、三十年ぶりに紙袋のデザインを刷新する。菓子を客先へ持って行き注文を取っていた御用聞き時代の「見本箱」をイメージしており、「二人一人の客に菓子を届ける」という思いを込めた。

(高嶋幸司)

大垣の老舗和菓子店

同店は一七五五(宝暦五)年に創業。大垣藩主・戸田家に菓子を納めていた。昭和初期ごろまで店頭販売はなく、注文を取って菓子を届ける「御用聞き」形式だった。見本箱は菓子

「榎谷」

を入れて客先へ商品を見せに行くために使う。現在でも京都では御用聞きを続ける和菓子店がある。

見本箱の大きさは、縦三十六センチ、横三十四センチ、奥行き十六センチ。木製で戸は引きき十六センチ。木製で戸は引き

上げ式、中は五段に仕切られている。外見は真っ黒で、前面には蔓柏の赤い家紋。簡素な色合いは「主役は中に入る菓子だからでしょう」と九代目の榎谷祐哉社長(四三)は考える。

二〇一五年の創業二百六十周年に向け、新しい紙袋のデザインを考えていた時、応接室に飾られていた見本箱が榎谷社長の目に留まった。「新しいデザインを考案するより、榎谷らしさが出せる」と見本箱の見た目をそのまま紙袋に生かした。

榎谷社長は「お客さまのもとへ歩き回り、一人一人のために菓子を作るという精神は地方の菓子屋としての原点。デザインはがらっと変わるが、新しい定番として定着していったほしい」と語った。紙袋は大きさを別々の五種類。一番小さいサイズは先行して使われており、今夏までにすべてのサイズで切り替わる。